

監修 大佛次郎 川口松太郎 木村毅

講談社

大衆文学大系

12

國枝史郎
佐々木味津三
三上於菟吉

大衆文学大系 12 國枝史郎 佐々木味津三 三上於菟吉集

昭和四十七年三月二十日 第一刷

著者 國枝史郎 佐々木味津三 三上於菟吉

装幀者 田中一光

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁十二番一 郵便番号 一一二
電話東京(〇三)九四五一一二(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 大製株式会社

定価 二八〇〇円

©國枝史郎 佐々木克子 三上庸吉 一九七二年
落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません

目次

國枝史郎集

神秘昆虫館

劍俠受難

五 九

佐々木味津三集

旗本退屈男

右門捕物帖

二七 三〇

三上於菟吉集

雪之丞変化

五三

年 解 解
譜 題 說

三 二 一

國枝史郎集

神 秘 昆 虫 館

一

「お侍様というものは……」女役者の阪東小篠は、微妙に笑って云ったものである。「お強くなければなりません」

「俺は随分強いつもりだ」こう答えたのは一式小一郎で、年は二十三で、鐘巻流の名手であり、父は田安家の家臣として、重望のある清左衛門であった。しかし小一郎は仕官していない。束縛されるのが厭だからで、放浪性の持主なのである。秀でた眉、ムッと高い鼻、眼尻がピンと切れ上がり、一脈剣気が漂っているが、物騒という所までは行っていない。中肉中丈、白色である。そうして性質は明るくて皮肉。

「どんなに貴郎がお強くても、人を切ったことはございますま

い」阪東小篠は云い出した。

「泰平の御世だ、人など切れるか」

「では解らないではございせんか。……果たしてお強いとお弱いのか？」

「鐘巻流では皆伝だよ。年二十三で皆伝になる、まあ／＼余程強い方さ」一式小一郎は唇を翹ね、ニヤ／＼笑ったものである。

「お侍様というものは、お強くなければいけません」

「だからさ、強いと云っているではないか」

「ねえ、貴郎」と阪東小篠は、そゝのかすように云い出した。

「一度でも人をお切りになった方は、度胸が決まると申しませうねえ」

「どうやらそんな話だな」

「お侍様というものは、度胸がなければ不可せんねえ」

「云う迄もないよ」と小一郎は笑止らしく横を向いた。

「貴郎に度胸がありますかしら？」

「有るとも有るとも大有りだ」

「人を切ったこともない癖に」

「小篠！」と云うと小一郎は、鳥渡脱むように相手を見た。「何か目算がありそうだな」

「何んの何んの何う致しまして」小篠は例によって笑ったが、微妙な笑いであると共に、吸血鬼的の笑いでもあった。「ねえ、貴郎、只妾はこう云いたいのでございますよ。——すべて女というのは、男が度胸を見せた時、すぐに飛びかゝって行くものだねえ」

「うむ、惚れるということか？」

「はい／＼左様でございます」

「成程」と云ったが小一郎は、いくらか物憂そうに考え込ん

だ。

と、話題をヒョイと変えた。

「それは然うとオイ小篠、南部集五郎は遣つて来るのかな？」

「よくお呼びして下さいます」

「彼奴も根気が好い方だなあ」

「ホッホッホッホッ、貴郎のように」

「そうさ、俺だつて根気はいゝよ。……ところで小篠、どっちが好きだな？」

「南部様もそんなことを仰有いました。——一式氏とこの拙者と、何方にお前は惚れているかなどと」

「で、どっちに惚れているのだ？」

「どっちがお強うございましょう？」

「ふゝん、それでは強い方へ、お前はなびくというのだな？」

「そんな見当でございます」小篠は妖艶にニッコリとした。

「そうか」

と云うと一式小一郎は、ズイとばかりに立ち上がった。「小篠、それでは復会おう」

「もうお帰えりでございますか」

「うん」

と云うと部屋を出た。

こゝは深川の、桔梗茶屋の、その奥まった一室である。一人になった阪東小篠は、心の中で呟いた。

「南部さんにも云つたものさ。一人お切りなさいましと。

……妾のためにお侍さんが、罪もない人間を叩切る！ あゝ何んなに可いだろう！ そこ迄妾に惚れてくれなければ妾の方だつて惚れてはやらない。お二人の中でサア何方が、希望を叶えてくれるかしら？ いゝ見物だよ、待ていよう」

桔梗茶屋を出た小一郎は、考え乍ら歩いて行く。

「小篠という女、俺は好きだ。美しい上に惨酷性がある。完全な女というもののさ。惨酷性の無い女なんか、女ではなくて雌だからなあ。……それにしても随分手強い女だ。俺は半年も呼びつづけたかしら？ それで未だにうんと云わない。……その上遂々本性を現わし、人を切れなどと云い出してしまった。……いかに彼奴のためとは云え、罪もない人間は切れないなあ。……そう云つても人を切らなければ、手に入れることは出来ないだろう。……そうしてまご／＼している中に、あの恋仇の南部奴にかゝ攫われまいものでもない。こいつだけは如何にも残念だなあ。……それは然うと此処は何処だ？」

四辺を見廻わすと小梅田圃で、極月十日の星月夜の中に、藪や林が立っている。

二

「これは驚いた」と小一郎は、思わず足をビタリと止めた。

「いかに考えて歩いたとはいえ、小梅田圃へ出ようとは！ こいつ狐につまゝれたかな？」

いや然うでも無さそうである。

「寒い寒い、急いで帰ろう」歩き出したが復考えた。「だが全く竹刀の先で、ボン／＼打ち合つた剣術は、実戦の用には立ちそうもないなあ。……人間一人サ——ッと切る！ 手答えあつて血の匂い！ ヒ——ッという悲鳴、のた打つ音！ ……悪くないなあ悪くないなあ。……一度辻切りをして見たいものだ」

不図小一郎は誘惑を感じた。「切るにしても女や町人は不可ない。うんと、屈竟な武士に限る！」

考え乍ら歩いて行く。と、行手に藪があり、ザワ／＼と風に

戦いでいる。その、裾辺まで来た時である、

「む、こいつは可笑しいぞ」小一郎はスッと後へ退き、ジツと藪を際かして見た。

何んにも変わったことは無い。が、小一郎には感ぜられるらしい。小首を傾げたものである。

「何奴がいるな！ 刀を按じて！」

迫身ノ刀氣ハ盤石ヲ貫ク、心眼察スル者則チ豪——鐘巻流の奥品にある。その刀氣を感じたらしい。で、寂然と動かなかった。

不意に小一郎は左手を上げ、鞘ぐるみ大刀を差し出したが、柄へ手をやると二寸ほど抜き、パチンと鐔鳴りの音をさせた。と、黒々と藪を巡り、一個の人影が現われた。

「さすがは一式小一郎氏、拙者の居るのを察しられたと見える」

「や、貴殿南部氏か！」

「さよう」というと南部集五郎は、二歩ほど前へ進み出たが、

「尾行けて参った、深川からな」

「は、あ左様か、何んのご用で？」小一郎は油断をしなかった。

「率直に申す！ お立合いなされ……」

「は、う」と云ったが小一郎は、一つの考えを胸へ浮かべた。

「さては貴殿に於かれても、阪東小篠にけしかけられましたな？」

「では貴殿にも？」と南部集五郎は、些か興醒めたというよう

に、
「それでは益々恰好というもの、通しはせぬ、お立合いなされ！」

「さようさ、こいつは遁れられまい」——だが俄にクツ／＼と

笑った。「それにしても武士道は廃れましたな」

「何故な？」と集五郎はトホンとした。

「元龜天正の昔なら、女を賭けては切り合いませんよ」

「これは如何にも」と南部集五郎も、胸に落ちたか笑い出した。

「アッハハハ御世の有難さで」

「え、と今年是天保十年、文化からかけて文政と、武士共柔弱になりましたな」悠々とこんなことを云い出した。

「これ／＼一式氏一式氏、何を云われる、つまらないことを！ 命の取り遣り、さあ参るぞ！」次第に急ぐのは集五郎である。

「心得て居る！」と小一郎は、尚悠々と云いつづけた。「拙者剣俠を志してな、上にも仕えず二十三の部屋住み、そこで長剣を横たえて、千里に旅しようと思っていました。ところが遂々おっこちましたよ、あの小篠という河原者にな」

「抜け！」と集五郎は威猛高である。「ごまかす気だな、卑怯千万！」

「剣俠も女にはま、つては」と小一郎はかまわず云いつづける。

「いやはや一向値打ござらぬ」

「チェッ」と集五郎は舌打ちをした。「これ臆したな！ 一式小一郎！」

「剣より女の方が魅力がある」

「何を馬鹿な！ それが何うした」

「そこで俺は徹底する」

「え？」と集五郎は一步退いた。
「人を切れという小篠の言葉、それに手頼って徹底する！ 人を切る！ 貴様を切る！ 女を取る！ 悪事をする！ 拙者悪剣に徹底する！ これ、集五郎！」とスッと進んだ。「飛び込んで来たな、よい所へ！ 俺はな、俺はな！」と復進んだ。

「待っていたのだ！ 辻切りの相手を！ ……参るゾーッ」と声を掛けた。

はじめての大音、野面を渡り、まるで巨大な棒のように、夜の暗さを貫いた。

同時に飛び退いた小一郎は、引き抜いた下緒をビュッとして振り、一つ抜くと早禪！ 袖が捲かれて二本の腕が生白くニュッと食み出したが、つゞいて聞えたは鞘走る音だ。と、俄に小一郎の体がシーンと下へ沈んだが、見れば右足を前へ踏み出し、膝から曲げて左足を敷き、腰を落したは蟻った竜！ 曲げた膝頭の上二寸、そこへ刀の柄を宛て、斜めに枝を張ったように、開いて太刀をつけたのは、鐘巻流での下段八双！ 真向からかかれば払って退け、突いて来れば搦み落とす、翻翻自在の構えである。星を刻むような鋒止先、チカ／＼チカ／＼と青光る。居付かぬように動かすのである。ブーッ！ と剣氣そこから湧き、暗中に虹でも吹きそである。

三

だが南部集五郎、こいつも決して只者ではなかった。東軍流では可成りの手利、同じく飛び退くとヌッと延し、抜き持った太刀柄氣海へ引き付け、両肘を縮めて構え込んだが、即ち尋常の中段である。

「成程」と呟いたは小一郎で「可成り立派な腕前だな。だが此俺の敵ではない。よし」と云うと擲擧し出した。「さあ南部氏、かゝってござれ！ 立っているばかりが能ではない。お揮いなされ、そのだんびらを！ 恰度星空だ光りましようぞ！ 廻わり込みなされ、右の方へ！ すると拙者は左へ廻わる。と、ご兩人ぶつかり合う。そこでチャリ——ンと一合の太刀！ ナ——ニ二合とは合わせませんよ、一合でちやアんと片が付く。

勿論貴殿が負けるのさ。それ石卵は敵しがたし！ 唐人も時には旨いことを云う。石と卵とぶつかれば、間違ひなく石の方が勝つて了う。拙者が石で貴殿が卵、さあ卵氏、卵氏はずんで、飛び込んでおいでなされ」喋舌り乍らも考えた。「俺は案外大胆だな、今夜が最初の実戦だが、大して怖くも恐ろしくもない。うむ、是なら人間が切れる。……よし／＼此方から迫り詰めてやれ」

足の爪先をすり、土を刻んでジリ／＼と、廻わりも込まずに前へ出た。

次第に後退さる集五郎、所謂の氣勢に圧せられ、兎もすると太刀先が上がるうとする。上がったが最後、「突き」が来る。そこで押し静め、押し静め、盛り返えして一步出た。と、小一郎は一步引いた。と、集五郎また一步！ と、小一郎一步退がった。「しめた」と考えた集五郎、相手が、「釣手」で退くとも知らず、ムッと氣息、腹一杯、籠めると同時に躍り込んだ。両肘を延ばし、太刀を上げ目差すは小一郎の右の肩、そいつをサッと左袈裟！

「駄目だよ」と小一郎は一喝した。瞬間に鏘然たる太刀の音！ つゞいて大きく星空に、一つの楕円が描かれた。即ち一式小一郎が敵の刀を払い落とし、身を翻えすと片手切り、大刀宙へ廻ねたのである。こいつが落ちれば集五郎の首は、斜に耳から切られただろう。

その際どい一髪の間だ、女の声が聞えて来た。

「蝶々をご存知ではございますまいか」

美しい清浄な声であった。ス——と小一郎の心から、殺伐な邪氣が抜けて了った。

と、また女の声がした。「永生の蝶々でございます。……蝶々をご存知ではございますま

いか」

何処に在るのだらう、声の主は？ 木立があつて、藪があつて、後は吹きさらしの、小梅田圃。女の姿など何処にも見えな。それにもかゝらず女の声は、すぐ手近から聞えるのであつた。

「もしご存知でございましたら、昆虫館までお届け下さい」

すると何うだらう、それに続いて、老人の聲が聞えて来た。

「娘よ、駄目だよ、永生の蝶、何んのこういう人達に、探がし出すことが出来るものか」

非常に威厳のある声であつた。手近の所から聞えて来る。だが矢つ張り姿は見えない。

「人殺しをしようという人間に、永久に生きる神秘の蝶が、何んの何んの探がし出せるものか」老人の聲が復聞えた。「さあ娘よ、そろ／＼行こう」

「はい、お父様」と女の聲がした。「それでは他へ参りましょう」それから優しくもう一度云つた。「お止めなさりませ……お侍様……殺生のことね……左様なら」

もう夫れだけしか聞えなかつた。立ち去る足音もしなかつた。声だけが突然土から生れ、倏忽と空へ消えたようであつた。

風が少しく強まつたらしい。藪がザワ／＼と揺れ出した。

刀を宙へ振り上げたまゝ、じつと聞き澄ましていた一式小一郎、で思わず溜息をしたものである。

「南部氏！」と呼びかけた。「今夜の立会い、止めにしましう」

「よろしい」と云うと南部集五郎は落とした刀を拾ひ上げた。

パチンと鎧音高く立て、刀を納めた小一郎、「お別れ致す」と云いすてると、町の方へスタ／＼歩き出した。

「何んだらう一体永生の蝶とは？」小一郎は歩き乍ら思索した。

「昆虫館とは何んだらう？」何が何んだか解らなかつた。「それにしても美しい声だつたなあ。心が一時に清まつて了つた。……若い美しい娘なんだらう。……逢つてみたいような気がするなあ」

彼の屋敷は麴町にあつた。そこへ歸つて来た小一郎は、意外な話を聞いたものである。

四

意外の話を話したのは、他ならぬ父の清左衛門であつた。

「それお前も知っている通り、この頃田安家と一ツ橋家とは、何彼に就けて競争ばかりし、面白くない氣勢が醸されているが、遂々変なものを争うようになったよ」こんな調子に話し出した。「と云うのは、他でもない、江戸の四方五十里の内に、昆虫館という建物があり、永生の蝶と云われている、雌雄二匹の蝶がいて、神秘の伝説を持っているそう。即ち二匹を手に入れて、交尾をさせて子を産ませた者は、莫大な財宝を得られるとな。云い出したのは女方術師、お前も知つて居る鉄拐夫人だ。で今やお館には、二匹の蝶を手に入れようと、苦心慘憺をして居られる。が、こいつは、馬鹿な話さ。永生とは何か、無限に生きることだ。ところが蝶は一年とは生きない。永生の蝶などある筈がない。云い出した人間が悪い。方術師とは由来道教の祖述者、虚無恬淡を旨とする、老子の哲学を遵奉するもので、無慾でなければならぬ筈だ。ところが例の鉄拐夫人、無慾でもなければ恬淡でもない。ヤレ鍊金だの仙丹だのと、金持になることと永生をすることとを、セツセとお館に進めて居る、彼奴決して方術師ではなく、精々のところ手品使い、初歩

の忍術の使い手に過ぎない。かような女を召し抱えたは、お館にとつて不幸だが、これとて矢張り競争から来て居る。一ツ橋家の方で先ず最初に、蝦蟇夫人という女方術師を抱え、大仰に吹聴したからさ。で、噂による時は、一ツ橋家でも同じようなことを、その蝦蟇夫人が云い出したため、矢張りそいつを手に入れようと、お館にはご苦心をされて居るそう。今日も一日中御殿では、その評定で大騒ぎだった。困ったものだ。こういう迷妄はな」

こいつを聞いた小一郎が、驚きと興味を感じたのは、説明するにも及ぶまい。膝を進めて訊いたものである。

「で、お父様、昆虫館は、どの辺にあるのでございましょう」
「云ったではないか、江戸を中心に、五十里以内の所にあると」

「確な在場所は解りませんで？」

「そうだよ、解っていないさうだ」

「鉄拐夫人が方術師なら、方術を用いて昆虫館の在場所、すぐにも探がし出してよさそうなので」

「だからよ、彼奴め、贗方術師さ」こゝで清左衛門は眉をひそめたが、「尤も彼奴め、こんなことを云ったよ。『平島にして樹木森々、大地あつて土地高燥、これ永生の蝶に適す』とな。アッハッハッハッ何を云うやら」

「昆虫館の持主は？」

「昆虫学者の老人ださうだ」

「美しい涼しい声を持った、娘と一緒にではございませぬかな」

「え？」と清左衛門は眼を円くした。

「いえ何これは此方の話で」こゝはごまかした小一郎は、心の中では考えた。「不思議だな、随分不思議だ。小梅田圃でも永生の蝶！ 家へ帰つても永生の蝶！ あつちでも此方でも昆

虫館！ 待てよ」と一層沈思した。「小梅で聞いた二つの声、その中一つは老人の声で、神々しい程にも威厳があった。学者か宗教家が剣聖か、兎まれ達識の人物でなければ、あゝいう声は出せないものだ。永生の蝶を探していたっけ！ ひょっとかするとあの声の主が、その昆虫館という建物の、持主などではあるまいかな。……いや／＼然うでは無さそう」小一郎は尚も考えた。「なにも昆虫館の持主なら、永生の蝶を探がす筈はない。と云うのは蝶を持っているからさ、では全然別人かな。……いや／＼然うでもなさそう」またも小一郎は考えた。「たしかあの時娘の声で『もしご存知なら昆虫館まで、どうぞお届け下さいまし』と、こうハッキリ云つたのを聞いた。と為ると、何うしても声の主達は、永生の蝶と昆虫館とに、関係あるものと見なければならぬ」こゝで一層考えた。

「永生の蝶というようなものが、本当にこの世にいるのなら俺は是非とも手に入れた。昆虫館というようなものが、本当に何処かにあるのなら、是非とも行って見たいものだ。しかし夫れより一層、俺の心から殺伐の邪気を、ス——ッと一度に引っこ抜いてくれた、美しい涼しい声の主に、是非とも逢つて見度いものだ。全くあの声は可かったよ。あんな可い声の持主だ、素晴らしい美人に相違ない。よし俺は探がしに行く！」

年が返つて新年になった。天保十一年一月十日、その晴れた日の早朝に、一式小一郎は屋敷を出た。

深編笠に裾縁野袴、柄袋をかけた蠟鞆の大小、スッキリとした旅装、足を入れたは東海道で、剣俠旅へ出たのである。

「考えてみればあぶなっかしい旅さ」小一郎は心中可笑しくもあった。「たつた一度だけ耳にした、娘の声を手頼りにして、声の主を探がしに行くのだからなあ」

長閑にボツ／＼歩いて行く。

五

川崎の宿まで来た時である。

「お武家様え、お馬に召しませ」可愛らしい娘の声がした。

振り返った一式小一郎、見れば駄賃馬の手綱を取り、女馬子が立っていた。

「さようさな、乗ってもよい」

「これは有難う存じます。どこ迄お供いたしましょう」

「そうさなあ、何処へ行こう」

「何処へでもお供いたします」

「さて何処へ行つたものか、これ女馬子、どこへ行つたら可いな？」

「ホ、ホ、ホ」と笑つたが、「京大坂など如何さまのもの」

「ちと遠いな」と小一郎はこれも笑い乍ら考えたが「これ女馬子、聞き度いことがある。土地高燥で半島で、木が茂つていて大きな池がある、そういう土地はあるまいかな？」

すると女馬子はどうしたものか、チラリと其眼を険しくしたが、すぐに、表情を取返した。

「三浦三崎の閑宿など、似つかわしいように存ぜられます」

「あゝ成程、そこが可からう。では閑宿へやってくれ」

小一郎はヒラリと馬へ乗った。ド―、ド―、ド―と馬子が云う。カバ／＼と馬が歩き出した。シャン／＼シャンと鈴が鳴る。旅が旅らしくなつて来た。

「旦那様え」と女馬子は、手綱を引き乍ら話しかけた。「ご遊山旅でございますか」

「まあザツと其辺だ」

「ご遊山旅にはお寒うございます」鳥渡皮肉な調子である。

「寒さなどには驚かない」

「それは左様でございますとも」クスツと笑つたが話しかけた。「土地が高燥で半島で、木が茂つていて大きな池がある。そういう土地で旦那様は、何かをお探しなさいますので」

「何！」と云つたが小一郎は、可成り吃驚りして了つた。「どうしてお前、そんなことを聞くのだ！」

「そういう土地には色々の不思議が、沢山あるからでございますよ」

「この女馬子怪しいぞ」はじめて気が付いた小一郎は、仔細に女を観察した。立派な体格で品がある。肌は白く、髪は多く、顔の道具も充分調い、上流の商家の娘のようだ。特に其眼が美しい。情熱の爲めには理性など、うっちゃつて了いそうな眼付である。上唇に黒子がある。却つて愛嬌を添えている。「こいつは本物の馬子ではないな」小一郎はひそかに考えた。「女賊などではあるまいかな」

すると女が声を掛けた。「大丈夫でございますよお武家様、妾、悪人ではございません」

「うゝん」と小一郎は参つて了つた。「何を申すか、つまらないことを！」

「お心で思つていらつしやうした癖に」

これにも小一郎は参つて了つた。

「お前には解るのか、人の心が！」

「旦那様のお心なら解ります」

「これは驚いた。どうして解る？」

「好きなお方でございますもの」

「え？」と又復小一郎は、胆を潰さざるを得なかつた。「お前は俺が好きなのか！」

「一眼で好きになりました」

「ヤレ／＼」と小一郎は苦笑した。「途方もないことになって
了った」

「恋しいお方のお心持だけは、恋している女に解ります」

「馬子！ あんまり嚇しては不可ない！」

「ホ、ホ、ホ、ホ、ご免遊ばせ」

どうにも小一郎には見当が付かない。何んだらう一体この女
は？ そこで身の上を調べることにした。

「ところでお前の名は何んというな？」

「はい、君江と申します」

「あゝ、君江か。年は幾個だ？」

「はい、十八でございます」

「で、両親はあるのかな？」

「はい健康でございます」

「で、家は何処にある？」

「三浦三崎の閑宿に」

「エッ」と小一郎は復嚇された。「これ、あんまり馴るもの
はない」

「いえ／＼本当でございます」女馬子の声は真面目であった。

「妾の家は三浦三崎、閑宿にあるのでございます。それで妾
は旦那様を、妾の家へお連れしようと、こう思っているの
でございます」

「それは一体どうした訳だ？」

「旅籠商売でございますもの」

「はゝあ然うか、旅籠屋か。……旅籠屋の娘が何んのために、
馬子稼ぎなどをやっているのだ？」

「探がしたのでございます」

「ふうん然うか、何者をな？」

「はい恋人をでございます」こう云うと女馬子はニコリし

た。

「そうして遂々今日はじめて、恋しいお方を探がし当てまし
た。旦那様あなたでございますの」

さて剣俠一式小一郎は、この女馬子に逢ったばかりに、意外
の事件に続々ぶつかり、恋と怨、悪剣と俠剣、暗黒と光明、迷
信と智慧、神秘の世界と現実の世界へ、隠見出没することにな
った。

六

その日から恰度五日経った。

三浦三崎の君江の家、その家号を角屋と云って、立派な構え
の旅籠屋である。その門口からフ拉里と出たのは、他ならぬ一
式小一郎で、口先に微笑を漂わせている。

「君江という娘、嘘は云わなかった。将しく家は旅籠屋で、両親もピン／＼健康でいる。そうして俺には親切だ。親切といえ
ばあの君江、ほんとに俺を愛しているらしい。ちと困ったが迷
惑でもない。明るくて快活でわだかまりが無い。たしかに野に
咲いた一輪の名花さ。そうは云っても此俺には、他に愛する女
がある。姿形はまだ見ないが、小梅田圃の切合いの最中、声だ
け聞いたあの女だ。是非是非探しあてゝ逢って見たいものだ。
……それは夫れとして其君江、大池のあるという森林の中へ、
何故この俺を行かせないのだらう？」

立ち止まって四辺を見廻わした。冬ざれた半農半漁の村が、
一筋寂しく横仆わっている。それを越すと耕地である。耕地の
向うが大森林で、檜や杉の喬木が、澄み切った空を摩してい
る。

ヒョイと何気無く振り返って見た。「はてな？」と云ったのは
何うしたのだらう？ 十五、六人の侍が、いずれも立派な旅

姿で、スタ／＼と此方へ来るからであった。

「こんな辺鄙な閑宿などへ、あゝも沢山の侍が、入り込んで来るとは只事でない。可笑しいなあ」と呟いたが、物蔭へ隠れて窺った。

それとも知らぬか侍達は、ギャ／＼話し乍ら通り過ぎる。

「まず兎も角も森林へな！ 昆虫館があるかも知れぬ」こう云ったのは頬髯のある武士で「無かったら今度は伊豆の方へ行く」

「いわば我々は先乗りで、探ぐりさえすれば可いというものさ」こう云ったのは段鼻の武士。

「永生の蝶！ 永生の蝶！ 果たしてそんな物ありませんか」こう云ったのは赤穂のある武士。

「昆虫館も永生の蝶も、拙者には用はござらぬよ。小梅田圃で耳にした、美しい涼しい声の主、それに是非とも巡り会いたいもので」

こう云ったのは誰あろう、恋仇南部集五郎であった。

タツ／＼と森林の方へ行つて了った。

物蔭から出た小一郎は仰天せざるを得なかった。

「一ツ橋家の武士どもだな！ 一ツ橋殿の命を受け、昆虫館を探がしあてようと、さてこそ遣つて来たらしい。……憎いのは南部集五郎だ、復もや俺の恋仇となった。あの時耳にした声の主を、昆虫館の関係者と、彼奴も目星を付けたらしい。……これは斯うしてはいられない。誰が止めようと森林へ分け入り、彼奴等より先に声の主を、目付け出さなければ心が済まぬ」

彼等の後を追うように、サ——ッ小一郎は走り出したが、その時角屋の門口から、ヒョイと一人の娘が出た。

「あれ！」と叫んだが君江であった。「お父様大変でございます！」

「どうした？」と云い乍ら現われたのは、五十年輩の立派な人物で、英五郎と云つて君江の父、この辺一帯の顔役で、髪は半白、下膨れの垂頬、柔和の容貌ではあるけれど、眼附に敢為の氣象が見える。

「小一郎様が森の中へ！」

「おゝ行かれたか！ 困ったなあ」

「お父様！ お父様！ どうともして……」

「さあ果たして助けられるかな！」

「あゝ小一郎様のお身の上に、もしものことがあろうものなら……死んで了います！ 死んで了います！」

「よし！」と英五郎は決心した。「兎も角も乾兒を頼り集め、森中手を分けて探がしてみよう！ ……併し名に負う木精の森だ、入り込んだが最後出られない魔所！ 目付かつてくれゝばいゝがなあ」

x

木精の森の底の辺に、一つの岩が聳えていた。裾から泉が湧き出している。

側で話している二人の男女があった。一人は臍たけた二十歳ばかりの美女で、一人は片足の醜男である。

「先生には今日もご不機嫌で？」こう訊いたのは片足の醜男。

「吉や、困まったよ、この頃は、いつもお父様には不機嫌でねえ」こう云ったのは美女である。

「それというのも大切な雄蝶を、お盗まれになったからでございましょうね」片足の男の名は吉次であり、そうして美女の名は桔梗様であり、その関係は主従らしい。

七

桔梗様の年は二十歳ぐらいで、瘦せぎすでスンナリと身長が

高い、名に相似^{おそ}わしい桔梗色の振袖、高々と結んだ綴子の帯、だが髪だけは無造作にも、頸で束ねて垂らしている。尤も其為め神々しく見える。いや神々しいのは髪ばかりではない。顔も随分神々しい。特に神々しいのは眼付である。靈性の窓！ 全く然うだ！ そう云いたいような眼付である。

山住みの娘などとは思われない。と云って都会の娘とも違う。勝れた血統を伝えた所の、高貴な姫君が何かの理由で、山に流されて住んでいる——と云いたいような娘である。永遠の処女！ こう云ったら可からう。物云いが明るくて率直で、くだわらない所が一層可い。

これに反して吉次の方は、可成り醜くて毒々しい。低い鼻、厚い唇、その上片脚というのである。しかし不思議にも智的に見える。学殖は相当深いらしい。筒袖を着て伊賀袴を穿き、松葉杖をついている。年は二十七、八でもあろう。

桔梗様は昆虫館主人の娘、吉次は館主の助手なのである。

「吉次や、然うだよ、お父様はね、あの雄蝶をなくなして以来、ずっと不機嫌におなりなすったのだよ」桔梗様の声は憂わしうである。

「私は不思議でなりませんなあ」吉次は松葉杖を突き代えたが「だって然うじゃアございませんか、尋常な蝶ではございませんのに、何処かへ消えてなくなつたなんて。……」

「でも本当だから仕方がないよ。現在蝶はいないんだからね」「どうやら先生のお言葉によると、盗まれたように思われますが、さあ果して然うでしょうか？」

「そうねえ、夫れはこの妾^{めかけ}にも、何うもはっきり解らないよ」「ねえお嬢様、ようございますか、あの永生の蝶と来ては、盗めるものではございませんよ。こうも嚴重に私達が、お守りをして居るのですからね。それにお山は要害堅固、忍び込むこと

なんか出来ません」

「ところが然うばかりも云えないようだよ」いよ／＼桔梗様は不安らしく「この頃お父様問わず語りに『恐ろしい敵が現われた』と、こんなことを二、三度仰つたからね」

「へえ、そんな事を？ 初耳ですなあ。で、一体どんな敵なので？」

「今のところでは解らないよ。……それは然うと妾としては……」こう云うと桔梗様はどうしたものか、じーッと吉次の顔を見たが「あゝ然うだよ妾としては、そんなお父様の仰有るような、恐ろしい敵が無からうと、盗もうと思えば永生の蝶、誰にだって盗むことが出来ると思うよ」

「へえ、左様でございましょうか？」吉次は不安そうに訊き返した。

「お前にも盗めるし妾にも盗める」これは暗示的の言葉であつた。

「何を仰有います、お嬢様！」吉次は一足引いたものである。

「仲間うちの者なら盗めるよ」

「あゝ夫れではお嬢様は、仲間のうちに裏切者があつて、そいつが盗んだと仰有るので？」

「そうもハッキリとは云っているんじゃアないよ。裏切者になら盗むことが出来る、たゞこんなように云っている迄さ」

「裏切者など居りますすものか」

「ほんとに／＼然うありたいねえ」

こゝで二人は黙つて了つた。吉次は足下を見詰めている。泉を湛えた岩壺がある。人間一人が這入れるくらい、円い形の岩壺である。湛えられた水の美しさ！ 底まで透き通らなければならぬ筈だ。ところが底は真暗である。非常に深いに相違ない。水面に空が映っている。その空を小鳥が飛んだのだろ